

メモワールから新しい小説へ : 小説家 Mme de Lafayetteの近代性

吉田, 紀子

<https://doi.org/10.15017/2332655>

出版情報 : 文學研究. 80, pp.51-70, 1983-02-25. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

メモワールから新しい小説へ

—小説家 Mme de Lefayette の近代性—

吉 田 紀 子

17世紀貴族社会において一世を風靡したロマネスク小説は1660—80のわずか20年の間に一気に衰退の途をたどる。小説はこの危機の時代を乗り越えて心理分析を中心とした近代小説に生まれかわるのであるが、ロマネスク小説の時代錯誤、楽天的な英雄主義に飽き足らなくなった読者の趣味の変化がその陰にあったことは言うまでもない。この小説ジャンル変革の旗手とも言うべき Segrais は、物事を「あるべき姿」comme (les choses) doivent être で描く小説 roman に対立するものとして、歴史から取材した、物事を「あるがままの姿」comme (les choses) sont で語る短編小説 nouvelle を主張する。これを現実主義への接近と行うことができよう。ではなぜこの時期のリアリズムが後世のいわゆる写実主義のように自然や外界に対するものでなく、心理的リアリズムという形をとったのであろうか。

M-Th. Hipp はこの小説の危機の時代を神話 mythe から現実 réalité への時代精神の変化としてとらえ、この時期の証言として小説と共にメモワール mémoires に着目するが、それだけでなくメモワールを古い小説と新しい小説を媒介するものと考える：

C'est au romanesque ancien... que les mémoires empruntent leur étiquette et leurs mythes: cependant ils annoncent aussi un nouveau mode de sensibilité, lié à la description du monde intérieur de l'individu; dès lors les moindres faits de la vie personnelle, l'état d'esprit intime apparaissent dans la structure des mémoires comme des circonstances et des événements infiniment importants, car l'auteur est à lui seul tout

un monde. Par cet aspect les mémoires contribuent à préparer l'avènement d'un roman nouveau qui apparaîtra à la fin du XVIIIe siècle.¹⁾

メモワール作家達は、小説の英雄のように生きることを望みながら叶わなかった自分の過去をせめて小説的世界、即ち神話の中で再編成しようとする。と同時に個人の内面生活を描き、己の自我を観察し、それに特権的価値を与えることを目的としているのである。貴族であるメモワール作家達の属する生活態が、社交の名のもとに宿命的に二重性を担わされたものであるから、彼らの関心がこの世界での人間心理のメカニズムに向けられたのは全く自然であった。そしてこのメモワールと同じ土壌から生み出された、Mme de Lafayette に代表される新しい小説が、同様に内的リアリズムを追求するものであったことも理解されよう。

さてこの新しい心理小説の傑作と見做される *la Princesse de Clèves* が作者自身によっては「メモワール」と定義されたことはよく知られている：

... Et surtout, ce que j'y trouve, c'est une parfaite imitation du monde de la cour et de la manière dont on y vit... aussi *n'est-ce pas un roman; c'est proprement des mémoires* et c'était, à ce que l'on m'a dit, le titre du livre, mais on l'a changé.²⁾

この言葉は *la Princesse de Clèves* が「宮廷社会」を忠実に写し出した、完全なる *réalité* を備えた作品であるという作者の自負に他ならない。しかしメモワールが心理分析という新しい小説技法を準備したものであるとするなら、この定義中の「メモワール」なる語がさらに重味を増し、*la Princesse de Clèves* に先立って著されたメモワール *Vie de la Princesse d'Angleterre* の存在が浮かび上がってくるだろう。

一貫して小説的ジャンルを手懸けてきた Mme de Lafayette にとってこの新しい文学体験はいかなる意味を持ったのであろうか。この視点から作品を検討することによって、彼女を心理分析に向かわせたものを知り、ひいては近代小説家 Mme de Lafayette 形成の過程を探ることができるのではないだろうか。

I

1654年、後の Lafayette 伯爵夫人, Marie-Madeleine de la Vergne は Chaillot 修道院で亡命中の英国王女 Henriette と出会う。彼女はこの邂逅をメモワールの序文で次のように回想している：

J'épousay son frère: quelques années avant le mariage j'allois souvent dans son couvent: j'y vit la jeune princesse d'Angleterre dont l'esprit et le merite me charmoit. Cette conoissance me donna l'honneur de la familiarité; en sorte que, quand elle fut mariée, j'eus toutes les entrées chés elle; et quoyque je fusse plus agée de dix ans, elle me temoigna jusqu'à la mort beaucoup de goust et de bonté.

(*Vie*, pp. 2-3⁹)

結婚によって Louis XIV の義妹となった Henriette が伝記の執筆を思い立った時、信頼できる旧友であり、すでに *la Princesse de Montpensier* の作者として文名を馳せていた Mme de Lafayette に白羽の矢を当てたのは当然であった。自身この作品の愛読者であった Henriette は小説家 Mme de Lafayette にこう提案する：

Ne trouvés-vous pas (dit-elle) que si tout ce qui m'est arrivé et les choses qui y ont relation estoient escrites, cela composeroit une jolie histoire? vous escrivés bien (adjoutat-elle), escrivés, je vous fourniray de bons memoires. (*Vie*, p. 3)

こうして Mme de Lafayette の前に提出された題材から彼女は二つの対象を引き出す——10数年間の恋をめぐる一人の女の内面のドラマと彼女の属している宮廷という社会、この二つの対象を持つメモワールは、従って *sentia* と *acta*⁹ の二つの側面を備えていると言えよう。ところで後者は Henriette の内面生活に影響を及ぼすが故に語られるのだから、二つは切り離されるべきものではない。しかし、新しい小説の成立におけるメモワール体験の意義を明らかにするという本論の目的のためには、二つの側面を別個に論じてゆくのが適

当と思われる。

宮廷社会を対象とする場合、Mme de Lafayette は冷静な観察者としての姿勢を崩さず、忠実に、徒らに美化することなく Louis XIV 治世初期の宮廷風俗を描き出そうとする。「Henriette d'Angleterre の生涯」と冠しながら、作品の¼がイントロダクションとしてこの社会の精神風土を描くのに費やされていることに注目すべきである。そしてこの導入部の検討は考察すべき題材に対する彼女の姿勢を明らかにしてくれよう。

Mme de Lafayette は時代の転換期を象徴する Mazarin の死から筆を起す。若き国王を中心として宮廷全体が大きな渦を描きながら動き始める。この宮廷を動かす原動力は政治的野心と恋愛、即ち ambition と galanterie である。

... ainsi beaucoup de gens esperoient quelque part dans les affaires et beaucoup de dames, par des raisons à peu près semblables, esperoient beaucoup de part dans les bonnes graces du Roy. (*Vie*, p.8)

acta を対象としながら、歴史的事実を羅列するのではなく、常に恋愛を研究対象としていた著者らしく、導入部から政治と色恋の隠れたつながりを露わにして見せるなど一つの明確な態度を示している。つまり著者がここで試みるのはむしろ宮廷社会という鏡に映し出される恋愛の種々相を描くことなのである。

歓楽の場たる宮廷の主人達にとっては、恋は暇つぶしのスポーツのようなもの、彼らの自己愛 amour-propre を満足させるのが唯一の存在理由である。が、宮廷人にとってはこの恋も野心達成の手段となる。メモワールの中で語られる数々の恋のエピソードが冒頭の著者の観察を一つ一つ補強する礎となるのである。例えば Henriette の生涯に暗い影を落とすことになる Vardes を Mme de Lafayette はこう見ている：

Vardes, qui pour lors etoit entierement dans la confidence de Madame, qui la voyoit fort aymable et pleine d'esprit, soit par un

sentiment d'amour, soit *par un setiment d'intrigue et d'ambition*, voulut estre seul maître de son esprit. (*Vie*, p. 56)

彼は己の利益のためには何事も厭わない——裏切、スパイ行為、密告、そして女の心を弄ぶこと、彼こそは権力者の寵を獲得しようと躍起になっている廷臣の典型である。また唯一人の純心なる恋人 La Vallière を舞台に引っ張り出したのは王宮のスカンダル封じのための苦肉の策、さらに彼女は一刻の幸せの後、野心満々の他の寵姫によって退場を余儀なくされる。彼女は常に他人のエゴと思惑に翻弄される犠牲者なのだ。この快楽と野心の坩堝の中で恋愛は純粋な感情ではありえない。それ故もたらされる不幸の諸相を Mme de Lafayette は書き留めるのである。

宮廷描写を目的としたメモワールのこの側面は Mme de Lafayette の恋愛観の形成に大きな役割を果たしたと言える。彼女はごく若い頃から恋愛に対する不信感を抱いていた。19歳の時、彼女は師の *Ménage* にこう書き送っている：

Je suis persuadée que l'amour est une chose incommode que j'ai de la joie que mes amis et moi en soyons exempts.⁸⁾

さらに彼女が初めて創作に手を染めた時、Segrais 等の主張に従って歴史短編小説 *nouvelle historique* を選んだのは長編のロマネスク小説に描かれたプレッシュューズ好みのオプティミストな恋愛観に対する不満のためであった。彼女はその *la Princesse de Montpensier* の冒頭でいきなり恋を戦争に譬えている：

Pendant que la guerre civile déchirait la France sous le règne de Charles IX, l'Amour ne laissait pas de trouver sa place parmi tant de désordres et d'en causer beaucoup dans son Empire.⁹⁾

ここで描かれる恋は人間の理性の及ばない情熱 *passion* としてあらわれるが、全ての価値観を根こそぎにする一種狂暴なその力を戦争に象徴させたのだ。恋を徳 *vertu* とするプレッシュューズ達と対立して、不幸をもたらすものと定義した Mme de Lafayette も、しかしながらヒロインの不幸の源を利害結婚へ

の不信、男性不信という極めてプレッシュューズ的思想に求めねばならなかった。彼女のペシニスムが不安定な、彼女の中で未だ明確な形をとっていない直感的ペシニスムとでも言うべきものであったからである。この *la Princesse de Montpensier* で予感された恋愛不信は、自分自身の眼で見、メモワールに写し出した諸光景によって確認される。つまり直感的ペシニスムがこの宮廷社会を対象としたメモワール体験によって事実裏付けられた経験的ペシニスムになったのである。

もう一つの、そしてより重要な対象は Henriette d'Angleterre の「生涯」である。そもそも自分の生涯を書き残そうとするメモワール作家の意図は何であろうか。Hipp は「復讐」revanche であると定義する⁷⁾——己を受け入れてくれなかった過去に対する、己の価値を認めてくれなかった世の人々に対する仕返しなのだ。メモワール作家が考えるのは自己の正当化であり、読者の共感を求めることであり、執筆はそうありたいと望んでいながらなれなかった自分にやっと「なれる」手段なのである。

Henriette は小説家 Mme de Lafayette に「美しい物語」une jolie histoire を書くように依頼した。言い換えれば、自らがヒロインの小説を書いてもらうこと、小説世界の中で自分の過去を再体験することを望んだのである。この希望を入れた Mme de Lafayette は Henriette によって語られる事実、あるいは彼女自身が居合わせた事件等を年代順に述べることはせず、かつてヴァロア期の歴史や年代記から一つの小説宇宙を作り出したように、これら雑多な生の題材を統一を持った一個のドラマに仕立て上げる。そしてそこに我々は実在の人物を扱うが故と言うにはあまりにロマネスク的な配慮を見ることになる。

長いイントロダクションで巧みに舞台となる宮廷の精神風土を用意した中に著者は最も輝かしい存在としての Henriette d'Angleterre を出現させる。Mme de Lafayette による彼女のポルトレを読んでみよう：

Me la princesse d'Angleterre avoit un souverain degré de beauté;

ce qu'on appelle les graces et les charmes etoient repandus en toute sa personne, dans ses actions et dans son esprit, et jamais princesse n'a esté si également capable de se faire aymer des femmes et de se faire adorer des hommes. (*Vie*, p.25)

「Mazarin 枢機卿死後の宮廷の状態をよく理解していただくために」と断って著者が挿入した当時の政治家、美女達のポルトレに見られる痛烈な筆さばきはここでは姿をひそめている。「実はせむしだった云々」⁹⁾と伝えられる Henriette に彼女は美貌、機知、豊かな感受性、知性等あらゆるロマネスク的美点を与える。さらに Henriette が最初にフランス宮廷と接触を持ったはずの亡命中のみじめな子供時代⁹⁾からではなく、英国の王政復古、フランス王弟との結婚という彼女の生涯でも最も輝かしい瞬間から筆を起こすところに後に続く生活との対比の中でこの華麗なる登場を印象付けようという作家の意図が窺える。

社交界での成功、夫の性格的欠陥から予想される結婚生活の破綻、国王との気紛れな恋愛、スキャンダル、王の新しい恋人 La Vallière の出現と矢継早やに Henriette の身辺を騒がす事件を語りながら、Mme de Lafayette はこの王弟妃をどのように見ていたのであろうか。

Madame vit avec quelque chagrin que le Roy s'attachoit veritablement à La Vallière; ce n'est peut estre pas qu'elle eût ce qu'on pourroit appeller jalousie, mais elle eût esté bien aise qu'il n'eût point eu de veritable passion et qu'il eût conservé pour elle une sorte d'attachement qui, sans avoir la violance de l'amour, en eût *la complaisance et l'agrement*. (*Vie*, p.36)

La Rochefoucauld の鋭い観察を思い出させる分析である：

Les femmes croient souvent aimer, encore qu'elles n'aiment pas: l'occupation d'une intrigue, l'émotion d'esprit que donne la galanterie, la peinte naturelle au plaisir d'être aimées et la peine de refuser, leur persuadent qu'elles ont de la passion, lorsqu'elles n'ont que de la coquetterie.¹⁰⁾

メモワールの執筆された時期¹¹⁾にはすでに、この文学史上名高い二人の交際は始まっていた。この老モラリストの指導のもと、彼女は仮面の下に隠された人間の心を観察し、当事者にとっても漠として混乱した感情を分析する術を身につけたようだ。実在の人であるが故に登場人物の内面に深く入り込むことはないが、彼女の眼は人の心を透視し正確に写し出そうとする。この Mme de Lafayette の眼でとらえられた Henriette とはいつも他人から尊敬され、賛美されることを必要とするタイプの人間であり、他人に及ぼす自分の力（権力であれ魅力であれ）を絶えず確信させてもらわねばならない人間である。恋はそういった証しを与えてくれるものであり、従って彼女が恋愛に求めるのは情熱の激しさではなく「満足」complaisance と「楽しみ」agrément なのである。Henriette にとって恋とは幸福を確認する手段であったのだ。

この人物像を前提にすれば、王と Guiche, Guiche と Vardes の間を絶えず揺れ動く彼女の心理は自と理解されてくる。結婚生活に失望して、Louis XIV とのスカンダラスな恋に夢中になる、恋人の心変わりですべての挫折を味わった時、自分の魅力の虜となった Guiche の危険な情熱を大して考えもせず受け入れる、そして恋人と心を打明けるべき侍女を奪われた孤独の中で策謀家 Vardes の誘惑に易々と掛ってしまう。Henriette は何よりも孤独を恐れたのだ。

これら三幕の恋のエピソードを経てドラマは一気に、Mme de Lafayette の手で周到に準備された終局へと向かう。舞台には、あるいは裏切られ、あるいは奪われて全ての恋を失った、全ての幸福追求の試みに破れた Henriette が一人残される。彼女はこの精神的危機をいかに乗り切るか、この混乱をどう解決し、新しい秩序を確立するのか、最終幕の、そしてメモワール全体の主要テーマがここにある。

la relation de la mort の冒頭で語られる英国訪問で、見事に外交特使としての役割を果たした Henriette に、我々はその人格の完成を見る：

...elle avoit entre les mains un traité d'où dependoit le sort

d'une partie de l'Europe; et la consideration que donnent les affaires se joignant en elle avec les agrements que donnent la jeunesse et la beauté, il y avoit un charme et une douceur rependue dans toute sa personne, qui luy attiroit une sort d'hommage qui lui devoit d'autant plus plaire qu'on le rendoit plus à sa personne qu'à son rang. (*Vie*, p. 96)

このテキストは前に引用したポルトレと対をなしており、ほぼ同じ語彙を使用しているが、社交界の女王に捧げられた賛辞とこの王弟妃に献ぜられた敬意の間には何と大きな隔たりがあることか。このように相変らず宮廷での輝かしい存在でありながら、Henrietteは自分を取り巻くこの世界への不信を隠さない:

(Elle me dit) qu'elle etoit si lasse de toutes les personnes qui lui l'environnoient qu'elle ne pouvoit plus les souffrir. (*Vie*, p. 98)

彼女の行動に目を光らせる者達の中に一人残され、彼女は自分の自由を制限し、周囲と折り合うことを学ぶ。幸福をあきらめ、孤独を受け入れることで彼女はあの無秩序から立ち直ったのだ。

恋の、即ち幸福追求の放棄によって Henriette は社会対個人の軋轢から逃れたのであるが、これはまた同時に生へのあきらめに結びつく。突然襲った病の床で Henriette は決定的に生に背を向けてしまう。しかし生涯を通じての友であった Mme de Lafayette によって語られる Henriette d'Angleterre の死の情景は、彼女の到達した静逸なる境地を示し、神々しささえ感じさせるものである。

Elle luy dit qu'elle connoissoit mieux son mal que les medecins et qu'il n'y avoit point de retour; mais elle dit cela avec la meme tranquillité que si elle eût parlé d'une chose indifferante.

(*Vie*, pp. 105-106)

Elle ne retourna jamais son esprit du coté de la vie; jamais un mot de reflexion sur la cruauté de sa destinée (...) point de question aux medecins pour scavoit s'il etoit impossible de la sauver; point

d'ardeur pour les remedes (...) une constance paisible au milieu de la certitude de la mort... (*Vie*, p. 112)

この作品において Mme de Lafayette は初めて成長するヒロインを提示した。つまり時間の流れの中で人間をとらえたのだ。Mme de Montpensier にせよ Mme de Tende にせよ、初期作品のヒロイン達は恋のもたらず惑乱のさなかに放り出されたままであった。彼女達には「死」という唯一の解決手段しか残されていなかったのである。Henriette は不幸な状態にあることと恋の混乱を秤にかけてみた。そして何物にもかき乱されない不幸の状態の方を選んだ。自分の深い存在を脅かす無秩序な心の動きを封じるために一つの選択を行ったのである。

この Henriette の生涯を対象としたメモワール体験は二つの意義を持つ。まず一人の女性が精神的危機を経て成長する過程という創作形式を獲得したこと。第二は隠された人間の内面を観察する眼を養ったことである。後者は Mme de Lafayette に心理的描写による物語の筋の内面化 *intériorisation de l'action* という新しい次元の表現手段を与えることになる。この二つが相まって、もう一つの成果、経験的ペシミズムを土台とした内的リアリズムをめざす心理小説へと結実してゆくのである。このように *la Princesse de Clèves* の中で明確な形で提出される恋愛観の形成においても、*la Princesse de Clèves* という小説自体の成立についても、このメモワール執筆の果たした役割は非常に大きいものであった。

II

「どうやら Mme de Lafayette にとって関心をそそられることといえば、きわめて独特な恋愛観をばくらに教えようとするだけで、彼女はただそれしか目ざさなかったように見えます。恋愛というこの情熱はひとを危険にさらす、これが彼女の特異なる公準なのです。」

...Il me semble que Mme de Lafayette ne vise, rien d'autre ne

l'intéressant au monde, qu'à nous enseigner une très particulière conception de l'amour. Son postulat singulier est que cette passion met l'être en péril.¹²⁾

この Camus の印象は全ての Mme de Lafayette 研究家が共通して感じることを簡潔に語ってくれる。彼女はこの独自の公準に従って歴史小説 nouvelle historique, ロマネスク小説, メモワールと様々なジャンルを試みた。そしてその都度、「男性対女性」、「社会対個人」の図式の中でそのペシニスムを説明しようと努めたのであるが、この文学修業の時代、特にメモワール体験によって次第に人間の心そのものに関心を持つようになったであろうことは前に述べた。

さて、*la Princesse de Clèves* に見られる恋愛はそれまでの作品の恋愛が負っていた汚点——Mme de Lafayette のペシニスムはその責任を追求することで不完全ながらも説明されていたのだが——をできるだけ除いた、殆んど純粹媒養的な形であられる。ここに恋愛という一つの極限状態をかりて、そこで裸形にされる人間の本質を深く追求する作家の意図を認めることができるのではないか。

ところが作者自身はこの作品をメモワールと呼び、さらに精密ではあるが *Vie de la Princesse d'Angleterre* で見せた手法を踏襲している。つまり導入部で「宮廷社会の完全なる模倣」une parfaite imitation du monde de la cour を試みているのである：

La magnificence et la galanterie n'ont jamais paru en France avec tant d'éclat que dans les dernières années du règne de Henri second. (P. C., p. 241)¹³⁾

L'ambition et la galanterie étaient l'âme de cette cour, et occupaient également les hommes et les femmes. Il y avait tant d'intérêts et tant de cabales différentes, et les dames y avaient tant de part que l'amour était toujours mêlé aux affaires et les affaires à l'amour.

(P. C., p. 252)

Mme de Lafayette はまず 《magnificence》 と 《galanterie》 という二語でこの舞台となる Henri II の宮廷を定義する。「豪華」と「雅び」、即ち外面的な輝きと洗練された様式という賛辞は続く一連のポルトレによって具体化され、同時に歓楽の場としての宮廷の役割が指示される。しかしながらこの華やかなみせかけの下には 《ambition》 と 《galanterie》、「野心」と「色事」——ここでの galanterie は最初のそれよりも具体的な恋愛遊戯とでも解釈されるべきものであろう——が支配し、しかも密接に係わり合っている。これは *Vie de la Princesse d'Angleterre* の世界である。メモワールの中に散りばめられていた諸光景が 《magnificence》, 《galanterie》, 《ambition》 の三語に凝縮され、Henri II の宮廷を借りて敷衍されているのである。

社会がこのように二重構造を持つ以上、個人にも二重の生き方が課せられる。Mme de Chartres はこの混沌とした世界に乗り出してゆく娘にこう助言する。「ここではね、もし表面のことで万事を判断していたら、あなたはいつも間違っただけなんですよ。そう見えるというのは決して真実でないというてよらしい。」¹⁴⁾ 《*Si vous jugez sur les apparences en ce lieu-ci, vous serez souvent trompée: ce qui paraît n'est presque jamais la vérité.*》 (P. C., p. 265)

これはまた裏返せば「決して本当の気持ちをあらわしてはいけない」「振り当てられた役割をちゃんと演じなければならない」という社交界の暗黙の約束事を示している。メモワール作家として宮廷社会を冷徹な眼で観察した結果得た判断と言えよう。

「宮廷社会とそこでの生き様の完全なる模倣」が作者の主張するような第一目的でないのは明らかであるが、この外的環境は真実らしき *vraisemblance* を与える単なる舞台装置でもなく、人物の感性によって屈折された形で呈示される。つまり彼らの心理的行為の大きな要因となっているのだ。さらにこのような環境に生きるには「己を知ること」即ち自己の心理分析が他者に対する武器となる。Mme de Lafayette は物語の展開する世界と自分の目指す小説と

の調和をここに見出したわけである。従って *la Princesse de Clèves* にメモワールと称することを辞さない Mme de Lafayette のメモワール作家的視点を無視してはこの恋愛心理を見てゆくことはできない。

さて Mme de Clèves はそれまでの作品の主人公達と同様、あらゆるロマネスクの美点を与えられた、しかしながら個性のない無人格な存在として登場する。M. de Clèves との結婚に何の疑問も抱かず、皇太子妃の友情を獲得した彼女の生活は「焦燥も不安も悩みもない」《sans impatience, ni inquiétude, ni chagrin》(P. C., p. 258) ものである。彼女の個性の欠如は完全なる社会との調和を意味する。この調和が Nemours と初めて会った時から揺らぎ始める。物語の真の始まりはこの時、この舞踏会の場面からである。

Comme elle dansait avec M. de Guise, il se fit un assez grand bruit vers la porte de la salle, comme de quelqu'un qui entrait et à qui on faisait place. (P. C., p. 261)

この瞬間から Mme de Lafayette は踊り続けるヒロインに同化してゆく：

Elle se tourna et vit un homme qu'elle crut d'abord ne pouvoir être que M. de Nemours, qui passait par-dessus quelques sièges pour arriver ou l'on dansait. Ce prince était fait d'une sorte qu'il était difficile de n'être pas surprise de le voir quand on ne l'avait jamais.

(P. C., pp. 261-262)

読者の視点も次第に Mme de Clèves のそれと重なり、彼女の感じる心の動き、突然湧き上がった混乱した印象を我物として感ずる。全てが奥方の眼を通して見られ、彼女の感性の鏡に映し出されたイメージとして与えられる。読者は Mme de Clèves の心の中へ知らず導き入れられるのだ。が決定的に Mme de Clèves の内面化が始まるのは、それと知らずに Nemours に対して抱いていた恋心を自覚した時であった。

情熱に抵抗しようとする彼女の前には二つの障害がある。一つは外的なもの、宮廷人としての義務が Nemours に会う日常的な機会を避けるのを許さ

ないこと。さらには好奇心に満ちた周囲に決して自分の感情を見せてはならないという試練が課せられ、「極度の緊張状態」の中で自分の心と向かい会う。そしてもう一つの障害はまさにこの心にあるのだ。Mme de Clèves の心の動きをまとめてみよう。

L'APPARITION DE NEMOURS

-l'admiration de Mme de Clèves.

«Il fit, en peu de temps, une grande impression dans son cœur.»

LA DECOUVERTE DE L'AMOUR

-l'expérience de la jalousie.

«Elle vit alors que les sentiments qu'elle avait pour lui étaient ceux que M. de Clèves lui avait tant demandés.»

-sa résolution d'avouer ses sentiments à sa mère et de lui demander secours.

LA MORT DE MME DE CHARTRES

-ses recommandations à sa fille.

-l'affliction extrême et la défiance de soi-même.

-sa résolution de ne pas voir Nemours et de ne pas l'aimer.

LA DECLARATION DE NEMOURS

-l'entrevue avec Nemours.

«Elle connut bien qu'elle s' était trompée lorsqu'elle avait cru n' avoir plus que de l'indifférence pour M. de Nemours.»

«Elle ne se flatta plus de l'espérance de ne le pas aimer; elle songea seulement à ne lui en donner jamais aucune marque.»

LA DECLARATION INDIRECTE DE MME DE CLEVES

-le portrait dérobé.

«Elle fit réflexion à la violence de l'inclination qui l'entraînait vers M. de Nemours; elle trouva qu'elle n'était plus maîtresse de ses paroles et de son visage.»

《(Elle) retomba dans l'embarras de ne savoir quel parti prendre.》

LA LETTRE PERDUE

-le tourment de la jalousie.

-l' entrevue avec Nemours.

-le tête-à-tête de Nemours et Mme de Clèves.

《Elle regarda avec étonnement la prodigieuse différence de l'état où elle était le soir d'avec celui où elle se trouvait alors... Elle ne se reconnaissait plus elle-même...》

《Je suis vaincue et surmontée par une inclination qui m'entraîne malgré moi. Toutes mes résolutions sont inutiles; je pensais hier tout ce que je pense aujourd'hui et je fais aujourd'hui tout le contraire de ce que je résolus hier.》

恋の意識／夫以外の男性に心を寄せることを恥じた彼女の「愛すまい」という決意／Nemours の告白に大きな衝撃を受け「愛さない」ことの不可能を知る／「自分の気持ちを見せまい」という決意／図らずも秘めたる恋心を相手に見せてしまった奥方の絶望——ここに見るのは *la Princesse de Montpensier* ですすでに提起されていた情熱の進行過程であるが、対男性の観点でとらえられるのではなく、情熱に押し流されそうになる自分自身との葛藤としてあらわれる。G. Poulet はそこに「情熱が心の中で次々にひきおこす体験」les expériences successives que (la passion) cause dans le cœur の過程と「情熱が精神になさしめる一連の発見」les découvertes que (la passion) fait faire à l'esprit の過程とを見、この二重の進行の各段階において常に心情の動きが精神の働きに先行するということを指摘している¹⁵⁾。この点を踏まえてもう少し精密に Mme de Clèves の心理を見てみよう。「情熱が心の中でひきおこす体験」とは不意打ちに襲ってくる感動であり、「精神のなす発見」は反省と決意を伴っていることが前表により明らかである。Mme de Clèves の心理はこのように感動—発見—反省—決意という極めてメカニクな軌跡を描いて進む。

このような分析は初期作品には見られない。確かに初期の短編、メモワールにおいても恋や嫉妬のもたらす不可解な心理状態を見事なメスさばきで解剖してみせてくれる箇所はある。が、心の動きを生きた、ダイナミックなものとして時の流れの中で描き、しかも人物達を待ちうける約束の瞬間へ送り届けようとする姿勢は Mme de Lafayette の新境地であるといえよう。

ところで反省や分析は常に過去の驚きについてなされるのであるから、その上に立つ決意は次にまた不意打ちにやってくる新しい経験に対しては何の役にも立ちはない。「精神のなす発見」とは未知の新しい感動の認識であると同時にそれに先立つ決意の失敗、つまり人間の意志の無力さの発見である。心理分析が常にレトロスペクティブであるが故に、情熱は理性を凌ぐ。ヒロインが情熱に押し流され、明晰な意識を失うにつれ、分析は混乱し、「何を決意すればいいのかわからない」「自分が自分でわからない」状態に追いやられる。この混乱の極限でなされたあの告白は意志の産物とはもはや言えない。むしろ理性を封じ込め、自分を他人の手に委ね、己を導こうとする努力をやめることである。

--Conduisez-moi, ayez pitié de moi... (P. C., p. 334)

--Réglez ma conduite; faites que je ne vois personne. C'est tout ce que je vous demande. (P. C., p. 339)

支えと頼んだ夫の死後、彼女は決断を迫られる。Nemours の求愛の前に奥方はいくつかの対立事項を提出する：

--Il n'est que trop véritable que vous êtes cause de la mort de M. de Clèves; les soupçons que lui a donnés votre conduite inconsidérée lui ont coûté la vie, comme si vous la lui aviez ôtée de vos propres mains. (P. C., p. 385)

--Mais les hommes conservent-ils de la passion dans ces engagements éternels? Dois-je espérer un miracle en ma faveur et puis-je me mettre en état de voir certainement finir cette passion dont je ferais torte ma félicité? (P. C., p. 387)

--Vous avez déjà eu plusieurs passions, vous en auriez encore; je ne ferais plus votre bonheur; je vous verrais pour une autre comme vous auriez été pour moi. J'en aurais une douleur mortelle et je ne serais pas même assurée de n'avoir point le malheur de la jalousie... il m'en est demeuré une idée qui me fait croire que c'est le plus grand de tous les maux. (P. C., pp. 387-388)

彼女の道徳的意識は夫の死の責任が彼と自分にあると言う、理性は、恋は持続し得ないものだと判断する、そして彼女の心情までが嫉妬の記憶を生々しく思い起こさせる。Mme de Clèves の拒絶は彼女の全人格を表わす。この最終的決断は小説全体を通じて準備されていた。無人格の存在から出発して、物語の進行の中で徐々にヒロインの人間形成が行なわれる、そしてこの情熱との苦闘の中で作り上げられた人格の全てでもって、理性と生きてきた経験と心情に照らして、彼女は Nemours を拒絶する。この roman d'analyse はこの意味で roman de formation¹⁶⁾ というにふさわしいかもしれない。

結局、Mme de Clèves は「義務」devoir ということで過去の恋を、「心の平穩」repos ということで未来の恋を断ち切るが、実際は自分の理性でどうすることもできない、自己把握を危くする一種狂暴なその力を恐れるが故に、情熱そのものを断罪しているのだ。「私は恋のままに導かれはしますが、それで盲目にはなりません。」《Les passions peuvent me conduire, mais elles ne sauraient m'aveugler.》(P. C., p. 387) という言葉は「恋は自分を盲目にしうる」と認めた時、初めて真実になったのだ。

世を捨て、社会との調和の努力から解放された時、奥方の内面のドラマは終わる。彼女のこの決断を逃避と考えるのは当たっていない。Henriette が孤独の中でその危機を解決したように、Mme de Clèves は隠遁によって情熱に根こそぎにされた秩序の回復を図ったのである。そこに幸福の可能性を犠牲にしても自分の深い存在を保護したいというむしろ前向きの姿勢を感じさせる。その厳しさは情念の坩堝である社交界と折り合うことすら許さない。情熱も野心も

なく「生きるだけで十分」《C'est assez que d'être》という境地に達すること、自己分析から解放されること、つまりは心情と理性の葛藤に終止符を打つこと、それは Mme de Lafayette によって提案された自己に忠実な人間の一つの生き方と言えよう。

ここに至るまでの奥方の心理は物語の中で展開するそれぞれの状況において、作者の透徹した計算から割出された同じ一つの公式に従って進む。そしてその度に作者は同じ問いを繰り返し問いかける。「人間は己を知りうるか、己を導きうるか」これは当時のモラリスト達の共通の問題意識であった。Mme de Lafayette は一種の情熱的単調さで同じ問いを発しつつ、一つの人間観を明示しようと努力しているように見える。ここでは恋愛だけが問題なのではない。恋愛という最も生の感情がむき出しにされる一種の極限状態で問われた人間の生き方に係わっているのだ。ペシミストな一つの解答をなす奥方の絶望的な感乱は La Rochefoucauld のマキシムを思い出させる：

L'homme croit se conduire lorsqu'il est conduit; et pendant que par son esprit il tend à un but, son cœur l'entraîne insensiblement à un autre.¹⁷⁾

しかしながら Mme de Lafayette は彼と同じペシニスムには止どまらない、彼女が Mme de Clèves に用意した「約束された場所」がオネットム honnête homme として生きる一つの可能性を示唆しているのだ。困難で、決して幸福な解決策ではない可能性ではあるが……

*
**

「芸術は人生を正確に再構成する」《L'art recompose exactement la vie》¹⁸⁾ と述べた Marcel Proust は「自分自身のうちに見い出した真実」vérités qu'on a atteintes en soi-même を探求することによって自分の生きた生を構成し直した。心理分析の最高峰、Proust のこの小説観、芸術観を

最初の心理小説作家の創作態度に認めるのは彼女を買い被ることになるだろうか。

20年間にわたる Mme de Lafayette の執筆活動は一つの探求の手段であった。彼女が直感的に抱いていた何かが初期短編で提出される、そしてメモワール執筆を通じて観察された彼女の周囲の諸光景によって検証される、こうして得た一つのヴィジョン——あるいはペシミストな恋愛観と呼んでもいいだろう——のもとに、彼女の生きた世界を再編成することで構築されたのが *la Princesse de Clèves* である。この作品宇宙は彼女独自の人間観に貫かれた整然とした美しさを備えている。現実から取材しながら現実を超えた世界を、彼女が見出した真実のまわりに凝結させる——私が小説家 Mme de Lafayette の誕生を見るのはこういう姿勢にであり、またそこに Proust にも共通する彼女の近代性を認めるのである。

注

- 1) Marie-Thérèse Hipp, *Mythes et Réalités*, Klincksieck, 1976. p460.
- 2) Lettre à Lecheraine, 13 avril, 1678.
- 3) Mme de Lafayette, *Vie de la Princesse d'Angleterre*, édition de M-Th Hipp, Droz, 1967. 以下同書からの引用は *Vie* と略記し、これに引用箇所を付す。なお引用文の綴り字は Droz 版のままとする。
- 4) M-Th, Hipp, *op. cit.*, p28. *acta*: faits et actes; *cogitata*: idées apparues; *sentita*: sentiments éprouvés.
- 5) Lettre à Ménage, 18 septembre, (1653?).
- 6) Mme de Lafayette, *la Princesse de Montpensier* dans *Romans et Nouvelles*, édition d'Emile Magne, Garnier; 1970. p5.
- 7) M-Th, Hipp, *op. cit.*, p28.
- 8) *Mémoires de Mlle de Montpensier*, cité par Gilbert Sigaux dans "Introduction", *Histoire de Madame d'Angleterre*, Mercure de France, 1965. p12.
- 9) Cardinal de Retz, *Mémoires*, Gallimard, (Bibliothèque de la Pléiade), 1956. p160.
- 10) maxime No. 277, La Rochefoucauld, *Maximes*, édition de J. Truchet, Garnier, 1967. p. 71.
- 11) genèse de l'oeuvre:
 - plan: 1664
 - rédaction: 1669
 - relation de la mort d'Henriette: 1670

avant-propos: 1684

- 12) A. Camus, *l'Intelligence et l'Echafaud* dans *Théâtre, récits, nouvelles*, Gallimard, (Bibliothèque de la Pléiade) p1890.
訳は清水徹訳「理知と断頭台」, (アルベール・カミュ全集第二巻, 新潮社) による。
- 13) Mme de Lafayette, *la Princesse de Clèves* dans *Romans et Nouvelles*, Garnier, 1970. 以下同書からの引用は *P.C.* と略記し, これに引用箇所の変数を付記した。
- 14) 訳は生島遼一訳「クレーヴの奥方」(岩波文庫) による。
- 15) Georges Poulet, "Madame de Lafayette" dans *Etudes sur le temps humain*, t. I, Rocher, 1976. pp166-176
- 16) Alain Niderst, *la Princesse de Clèves*, Europe Editions, 1973. p60
- 17) maxime No43, La Rochefoucauld, *op. cit.*, p16
- 18) Marcel Proust, *Temps retrouvé, A la Recherche du temps perdu*, t. 3 Gallimard (Bibliothèque de la Pléiade), 1977. p898